東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2010年5月21日

客をもてなすこと

親愛なるムスリムの皆様。私達の教えは、助け合い、支え合いを命じています。崇高なるアッラーは、「寧ろ正義と篤信ために助け合って、信仰を深めなさい」[1]と仰せられ、信者達の間で善行の行為を広がるように勧められました。その結果として、ムスリムはあらゆる助け合い、支えあいを崇拝行為として思うことが必要です。お客様に対しての良い振る舞いも、この考えや信条に含まれるものです。客に対して家の扉や心を開くことは、イスラームにおける兄弟愛、人間に与えられた価値、一体化、分かち合い、そして支えあいの最も美しい例です。

親愛なるムスリムの皆様。お客様をもてなすということについて、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）が我々の最善の模範です。このことに関して彼は「誰であれ、アッラーと審判の日を信じるなら、各をもてなしなさい」と勧めています。私たちに勧められたことを実施されたアッラーの使徒は、ご自身も客をもてなすことを好まれ、その食卓には、客や助けを必要としている人々が常におられました。預言者ムハンマドは、お客様のドゥアーがアッラーに認められるドゥアーのうちに数えられ、客をもてなす家の住人には善や恵みが必ず与えられるといことを明らかにされました。客をもてなすことをできる状況にあるにも関わらずそれを好ましく思わない人に対しては、「客をもてなすことを好まないものに善はない」と警告しました。

客をもてなすことに関してもう一つの例は、預言者イブラーヒームです。クルアーンでは、彼が全く知らない客をもてなしたことを私たちに描かれ、模範とすべきであることを下記の節で述べています。「あなたがたは、イブラーヒームの尊い賓客たちの物語を聞いたのか。かれらはかれ（イブラーヒーム）の家に入って、「平安あれ。」と言った時、かれも「平安あれ。見知らぬ方々よ。」と答えた。それでかれはそっと家族のところに引き返し、肥えた仔牛（の焼肉）を持って出て、それをかれらの前に置いた。（だが手を付けないので）かれは言った。「あなたがたは、召し上りませんか。」[2]

この例において、客に対しては愛情や敬意を持ち、好意を示し、笑顔で振舞うことが強調されています。単に物質的なものを提供するだけでは、満足させるようなもてなしにはならないのです。

預言者イブラーヒームは、客の挨拶に非常にすばらしい形で答えられました。例え彼らを家に入れられたこと、食事の準備のために彼らのそばからそっと離れたこと、家にあった最良の食べ物を提供されたことなどが、模範とされるべきことです。

兄弟姉妹の皆様。知っている人であろうと、知らない人であろうと、私達の家、町、あるいは、国にやって来た人々に対し、宗教、民族、文化が何であれ、笑顔で対応し、心から好意を示し、私たちから満足して去っていけるような振る舞いは、アッラーのご満悦を得られる行為です。本日のホトバを次ぎのハディースで終えたいと思います。「次の三人のドゥアー（祈願）は、認められないということは決してないであろう。抑圧された者のドゥアー、客のドゥアー、そして父母の子供達へのドゥアーである」

[1] 第5章2節

[2] 第51章24-27節